

西土居遺跡群

—— 西土居工業団地用地造成に伴う埋蔵文化財調査概報 ——

1999年12月

三木町教育委員会



写真1 西土居遺跡群航空写真 (東より)



写真2 B調査区航空写真 (真上より)

はじめに

現在、埋蔵文化財に対する関心は日々高まり、適切な保護を図りながら、貴重な文化遺産を後世に伝えていかなければなりません。近年、三木町においても開発事業に伴う発掘調査が増加し、埋蔵文化財保護の動きが高まっています。

このたび、西土居工業団地用地造成工事に伴って実施した、西土居遺跡群の発掘調査結果の概要を収載いたしました。

西土居工業団地造成区域内の埋蔵文化財については周知の西土居古墳群が所在していることから、その取扱いについて関係部局と慎重に協議しましたが、発掘調査による記録保存の措置を取ることになりました。

調査の結果、当遺跡は尾根筋頂部から北東方向に延びる小丘陵とその周囲の崩状地状緩傾斜地に展開している、墳墓・古墳・集落等の複合遺跡であることが確認されました。なかでも、群集墳、土壙墓群の確認は当時の墓制の変遷を知るうえで貴重な資料を得ることができ、当町の歴史に新たな1ページを加えることになりました。

本報告書が、地域史解明の資料として、また今後の文化財保護・保存のために活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成に際し、関係機関及び関係者各位から賜りました多大なご指導・ご協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成11年12月

三木町教育委員会
教育長 小川和夫

例　　言

1. 本報告書は、三木町教育委員会が西土居工業団地用地造成に伴い発掘調査を実施した、西土居（にしのどい）遺跡群の調査概要を収録したものである。
2. 発掘調査の実施及び本書の執筆、編集は三木町教育委員会主事 石井健一が担当した。
3. 調査にあたっては、次の関係機関から協力を得た。記して謝意を表したい。
(順不同・敬称略)
物香川県埋蔵文化財調査センター、香川県教育委員会文化行政課、三木町土地開発公社、
前同榮社設計事務所、前大森組、四国航測株、地元水利組合、地元自治会
4. 遺構番号及び呼称は、新たに確認した古墳及び方形台状墓については周知の西土居1～6号墳に続ける形とした。また、B区で検出した土壤墓群については土壤1～25と呼んでいる。
5. 実測及び整理作業にあたっては、下記の方々の御教示、御協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同)
石野博信、丹羽祐一、國木健司、山本英之、山元敏裕、大久保徹也、森下英治、森下友子、
戴本晋司、大鷗和則、萬木一郎、阿河銳二、松田重治、多田（松尾）歩、東条貴美、
太田朋子、吉田（福西）由実子
6. 発掘調査及び整理作業は下記の方々の協力を得て実施した。(順不同)
上枝竹雄、黒川誠、久保安雄、高橋秀男、高橋キヨ子、石原サヨ子、櫛山英子、岡田藤子、森山京子、
岩田明、川北幸太郎、成瀬等、横山弘、児玉忠行、森下一重、溝潤美保子、明石了、安部利恵子、
上枝光伸、坂井克明、佐藤ひろみ、中井尉人、中井咲絵、中井美絵、兵頭康之、平井晉人、森山隆正、
村井友哉、八塚彰子、吉田善一
7. 本書挿図中のレベル高はすべて海拔を表す。挿図の一部に建設省国土地理院発行の25,000分の1の
地理図「志度」「庵庭」を使用した。
8. 出土遺物及び図面は三木町教育委員会にて保管している。

目 次

第1章 調査に至る経過.....	4
第2章 立地と環境.....	6
第3章 調査結果の概要.....	7
(1)調査区の設定.....	7
(2)各調査区の概要.....	7
A 区 ①7号墳	10
②8号墳	10
③9号墳	11
④10号墳	11
⑤12号墳	12
⑥11号墳	12
⑦13号墳	13
⑧14号墳	13
⑨SH01	13
S-A区 ⑩16号方形台状墓	14
⑪15号墳	17
B 区 ⑫6号墳	19
⑬土壙墓群	20
第4章 ま と め.....	24

挿図目次

第1図	周辺の遺跡位置図	5
第2図	調査区及び遺構配置図	8
第3図	7、8号墳周溝内出土遺物実測図	10
第4図	9号墳周溝内出土遺物実測図	11
第5図	10号墳周溝内出土遺物実測図	11
第6図	11号墳周溝内出土遺物実測図	12
第7図	S-A調査区遺構配置図	14
第8図	16号方形台状墓平・断面図	16
第9図	15号墳石室実測図	17
第10図	15号墳出土遺物実測図	18
第11図	6号墳周溝内出土遺物実測図	19
第12図	6号墳石室実測図	19
第13図	B調査区遺構配置図	21

写真目次

写真1	西土居遺跡群航空写真（東より）	写真21	I群全景（北東より）
写真2	B調査区航空写真（真上より）	写真22	IV群・17号墓検出状況（南西より）
写真3	発掘調査作業風景	写真23	IV群・壹棺3検出状況（北東より）
写真4	7、8号墳検出状況（北東より）	写真24	I、II、III群全景（南西より）
写真5	9、10、12号墳完掘状況（南より）	写真25	IV群全景（北より）
写真6	7号墳検出状況（南より）	写真26	VI群全景（東より）
写真7	8号墳完掘状況（北より）		
写真8	9号墳検出状況（南西より）		
写真9	10号墳検出状況（西より）		
写真10	12号墳完掘状況（南より）		
写真11	11号墳検出状況（西より）		
写真12	11、13、14号墳完掘状況（南東より）		
写真13	S H01検出状況（北西より）		
写真14	S-A調査区近景（北東より）		
写真15	16号方形台状墓検出状況（東より）		
写真16	16号方形台状墓検出状況（南より）		
写真17	15号墳石室検出状況（東より）		
写真18	15号墳石室検出状況（南より）		
写真19	紡錘車		
写真20	6号墳石室検出状況（北西より）		

第1章 調査に至る経過

三木町は、不安定兼業農家の就業体制の確立、工業導入の促進、地理的環境条件を活かした農業と工業の調和ある発展を図るために、農村地域工業等導入促進法に基づいた実施計画を策定し、井戸地区西土居において工業団地の造成を計画した。三木町土地開発公社は三木町の委託を受けて、誘致企業を含む3者で協定書を締結した。

三木町土地開発公社は平成5年4月16日に西土居工業団地用地造成工事に伴い、事業予定地内について埋蔵文化財所在の有無及びその取扱いを当町教育委員会に照会した。同事業予定地内は周知の西土居古墳群が所在しており、その残部についてもさらに包蔵地の範囲の拡がりが予測された。このことから、当町教育委員会は埋蔵文化財の包蔵状況を把握するため、香川県教育委員会文化行政課の指導により、平成5年6月22日から25日、同年12月1日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、設定した各トレンドにおいて弥生・古墳・中世の関係遺構や遺物を確認するに至り、事業予定地内における保護措置が必要とされた。そこで当町教育委員会は三木町土地開発公社と開発地区内における埋蔵文化財の取扱いについて協定書を締結し、香川県教育委員会文化行政課の指導で事前調査を実施することとなった。

当初は遺構が希薄であると試掘調査で判断されていたため短期間の調査と思われていたが、調査を進めていくうちに、試掘調査結果の予想を超える遺構密度の濃い複合遺跡であることが判明し、調査の長期化が想定されることとなった。発掘調査を実施して間もなく新設高校用地造成に伴う花崗土採取（天神山古墳群）、県営圃場整備事業（田中南原遺跡）の緊急事業を優先することから一時中断することになった。よって、発掘調査は平成6年8月22日から同年10月30日の約3,000m²を第1次調査、平成7年1月17日から翌年7月31日の約7,000m²を第2次調査とした。



写真3 発掘調査作業風景



第1図 周辺の遺跡位置図 (1/25,000)

- | | | |
|--------------------|--------------------|-----------------------|
| 1 西土居遺跡群 | 11 カンカン山古墳群(1~13号) | 21 中代古墳(1~2号) |
| 2 西土居古墳群(1~6号) | 12 八王子古墳 | 22 静御前の塚(中世)
(長尾町) |
| 3 堀切古墳群(1~2号) | 13 二条城跡(中世) | 23 中代古墳(1~2号) |
| 4 丸岡古墳群(1~3号) | 14 妙顯古墳 | 24 石檻神社古墳 |
| 5 蛇の角古墳群(1~16号) | 15 高木古墳 | 25 川上古墳 |
| 6 山大寺池西丘上古墳群(1~3号) | 16 剣山古墳 | 26 稲荷山古墳 |
| 7 山大寺跡(中世) | 17 天満遺跡 | 27 打越古墳 |
| 8 山大寺池北丘古墳 | 18 西山古墳 | 28 丸井古墳 |
| 9 諏訪墓所(中世) | 19 野倉古墳群(1~3号) | 29 前山古墳(1~2号) |
| 10 三條城跡(中世) | 20 天満古墳 | |

第2章 立地と環境

二木町は香川県の東部に位置し、北は木田郡乍町と大川郡志度町、西は高松市、東は大川郡長尾町、南は香川郡塩江町と徳島県美馬郡鷲町に接する南北に細長い形をしている。また、町の南北には山地を有しており、北部には立石山、小野ヶ原山など標高200~300mの山塊を挟んで乍町に接する立石山地がある。南部では当町最高峰の大柏山や高仙山をはじめとして標高500~600mの山頂が連なる阿讃山地がある。中央部では新川水系の諸河川と長尾町境を流れる鷲川に沿って沖積平野が広がっている。また新川、銀治川、吉田川、朝倉川流域には阿讃山地より平野部に向かって放射状に支脈や小丘陵が幾筋も派生して谷筋や扇状地を形成している。なかでも井戸地区は小丘陵の尾根や先端部に多くの古墳群が点在しており、西土居遺跡群は尾根筋頂部から北東方向に延びる小丘陵とその周囲の扇状地状の緩傾斜地をその範囲としている。

周辺の遺跡を考察してみると、旧石器時代については七ツ塚古墳試掘調査によりサヌカイト製糞状剥片が検出されたにすぎない。

縄文時代については南天枝遺跡から晩期の土器、高松市前山東・中村遺跡からは後期前半の土器と晩期の遺構を確認している。高松市小山・南谷遺跡では晩期の落し穴状土坑も検出しており尾端遺跡、西浦谷遺跡でも時期は不明であるが、同様の遺構が検出されていることから今後確認される可能性がある。

弥生時代になると福万遺跡で前期末の土器や香川大学農学部遺跡からは前期後半の土器が多量に確認されていることから平野部で集落が営まれたようである。中期には鹿伏・中所遺跡で集落の形成が確認されているが、中期末になると集落は丘陵部へと移り、白山遺跡群、西浦谷遺跡や高松市久米池南遺跡などの高地性集落が営まれている。後期になると丘陵縁辺部や平野部を中心として町内一円に拡がりをみせ、鹿伏・中所遺跡、砂入遺跡、田中南原遺跡などは古墳時代にかけて長期的な拠点集落を形成している。

古墳時代では池戸八幡神社1号墳は近年の測量調査で低平な前方部から前期初頭に位置づけられ、町内唯一の前方後円墳であることが確認されている。周辺の前期古墳としては長尾町に多くみられ、当遺跡より新川を挟む東丘陵では県内でも古い段階の前方後円墳で知られる丸井古墳、福荷山古墳、中代古墳がある。中期になると同丘陵に位置する川上古墳や香川医科大学病院建設に伴い検出された樺八原古墳群が著名である。後期になると古墳の分布は町内南北の山地において拡がりをみせ、南部阿讃山地の丘陵では城池古墳群、蛇の角古墳群、諏訪カンカン山古墳群などの大型の群集墳の他、丸山古墳、竜現社古墳、西山古墳など単一の大型古墳も点在している。また当遺跡の南方の丘陵先端部に所在する野倉1号墳からは四乳鏡、西方の小独立丘陵に所在する斬切古墳からは紡錘形が出土している。

古代については、出土瓦より白鳳から奈良時代にかけて上高岡廃寺・長楽寺→始覺寺跡の順で古代寺院が創建されたと推定される。

第3章 調査結果の概要

(1) 調査区の設定

三木町南部を占める阿讃山地からは北方平野部に向かって細長い尾根筋が幾筋も延びている。その先端付近は県下有数の墳墓地域となっているが、なかでも新川西岸の尾根筋は古墳密集地域として注目されるようになってきた。これらの古墳はこの尾根筋先端付近の頂部から平野部に向かって放射状に幾筋も派生する小丘陵上に立地している。西土居遺跡群は尾根筋頂部から北東方向に延びる小丘陵とその周囲の扇状地帯の緩傾斜地に展開している、墳墓・古墳・集落等からなる複合遺跡である。

調査区は丘陵の谷筋を含む扇状緩斜地をA区、谷筋に拡がる扇状緩斜地の南丘陵の北斜面をS-A区、昭和57年に調査が実施された丘陵でさらに南西に続く尾根稜線上をB区とした。A区は近年まで水田として利用されていた地区であり、現在の圃地を基準として奥より順次1～8区の調査区に設定した。

(2) 各調査区の概要

A区の遺構面は3層あり、上層面からは柱穴・石垣が数多く確認され、また、瓦・土師器片も出土していることから中世期の遺構が存在していることは明らかとなったが、その構造・性格等は明確にできなかった。中層面からは古墳時代後期前半から後期中葉にかけての古墳を8基確認した。いずれも墳丘部の削平が著しく主体部は検出されなかったが、周溝の保存状態は良好なものが多く、立地と群構成は明らかとなった。8基の古墳は大きく7～10号墳、12号墳の5基と11、13、14号墳の3基との2群に分かれる。前者はA区北方の小丘陵南側斜面部の裾付近に連続する形で築造されている。後者はS-A区の丘陵部先端付近の南東斜面部に三角配置している。古墳は厚い弥生土器包含層上面を遺構面としており、下層面はその包含層面で確認した。検出した遺構は堅穴住居跡・土坑・溝・ピット等である。

S-A区はA-2区の南に位置する尾根丘陵先端部とその北斜面を調査区としている。同丘陵は整地造成がなされており、その免れた箇所について弥生時代後期後半の方形台状墓と古墳時代後期の古墳を1基を検出した。

B区は昭和57年に調査が実施された丘陵でさらに南西に続く尾根稜線上に位置する。同地区は戦前後の開墾の影響が多少みられるが、尾根稜線に対し平行・直交する弥生時代後期から終末期にかけての土塙墓を25基と方形台状墓2基、壺棺7基を検出した。また周知の6号墳の解体も併せて実施した。

以下、調査区ごとに主な遺構について概略を述べる。

第2図 調査区及び遺構配置図

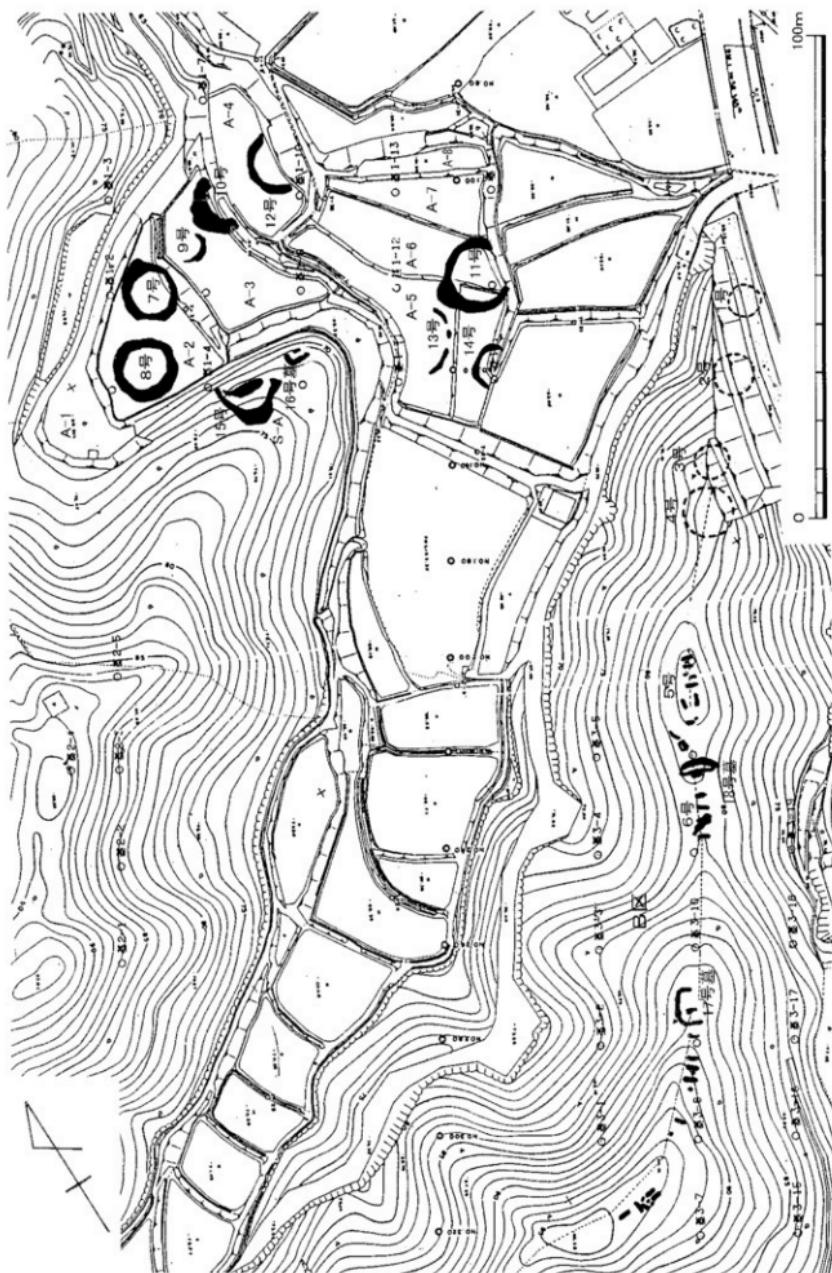




写真4 7、8号墳検出状況（北東より）



写真5 9、10、12号墳完掘状況（南より）

A 区

① 7号墳

7号墳はA-2区の北隅の丘陵裾部の緩斜地に立地する。墳丘の盛土部分は開墾による削平のため消失している。主体部は不明であるが、墳丘は南北9.8m、東西9mのやや南北に細長い楕円形を呈する。周溝は幅1.2~3.6m、深さ0.2~0.5mを測り、周溝の東部では拳大から小児頭大の塊石を集中的に検出した。また周溝の東半部を中心に数箇所で壺、壺を中心とする破碎須恵器片を検出している。また、周溝西肩部では同一遺構面で竪穴住居との切り合いが確認された。墳丘部では周溝をもつ土坑も検出しておらず、その周溝内では弥生時代後期後半から終末期の土器滲りが確認されている。

第3図の1は7号墳周溝内から出土した須恵器壺蓋であり口径13.6cm、器高4.5cmを測る。天井部と体部の境は比較的明瞭な段を有し、口縁端部も内傾する段がみられる。天井内面には円弧タタキのスタンプが残る。TK10型式に併行する段階に位置付けられ、6世紀中葉頃に古墳が築造されたものと推定される。

② 8号墳

8号墳は谷地形の奥に立地し、7号墳に西隣して検出された。墳丘は開墾・削平によりほぼ完全に消失しており、周溝部のみの検出である。周溝は幅1.6~3.4m、深さ0.3~0.6mを測り、墳丘は南北10.6m、東西10.2mのほぼ正円形を呈する。周溝内の南半部を中心に壺、壺の破碎須恵器片が検出された。また、周溝の埋土や墳丘内から弥生土器が多く出土しており、尾根丘陵から谷部にかけて集落遺跡が存在していたことを示唆している。

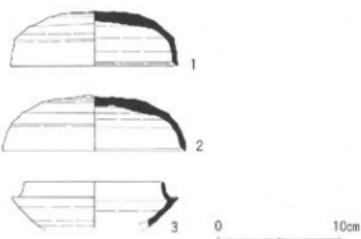
第3図の2、3は8号墳周溝内から出土した須恵器である。2は壺蓋であり、口径15.0cm、器高4.6cmを測る。天井部と体部の境は明瞭でなく、口縁端部の段もわずかに留める程度となっている。3は壺身の小片で立ち上がりの端部は丸い。TK10型式にやや後出する段階に位置づけられ、6世紀中葉の新しい段階に古墳が築造されたものと推定される。



写真6 7号墳検出状況（南より）



写真7 8号墳完掘状況（北より）



第3図 7、8号墳周溝内出土遺物実測図

③9号墳

9号墳はA-3区北端部で7号墳に東隣して検出された。土地造成によりかなり削平を受けており、主体部は欠損している。そのため、三日月状に周溝残部を検出したにすぎない。周溝は最大幅1.6m、深さ0.3mを測り、遺存部分より直径約6.4mの円墳である。

第4図は9号墳周溝内から出土した須恵器である。1は壺蓋であり、口径15.4cm、器高5.3cmを測る。天井部と体部の境には比較的明瞭な段差をもち、端部には内傾する明瞭な稜を有する。2は壺身であり、口径13.0cm、器高5.0cmを測る。立ち上がりの端部は丸い。これらは、TK10型式に位置づけられることから、6世紀中葉頃に築造された古墳と推定される。

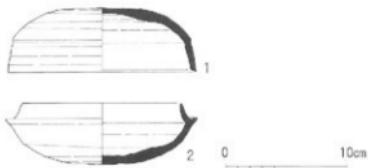
④10号墳

10号墳はA-3区北東端部で9号墳に東隣して検出された。かなり土地造成を受けているため主体部は失われており、A-4区への拡がりも認められなかった。遺存部分より想定すると直径約9.2mの円墳である。周溝は幅2.6~4.5m、深さ0.4~0.6mを測り、埋土からほぼ全城に拳大から小児頭大の塊石が確認された。周溝内の北西部を中心に須恵器の壺、南部では壺の破片が検出された。

第5図は10号墳周溝内から出土した須恵器である。1は壺蓋で、口径14.0cm、器高5.0cmを測る。天井部と体部の境には沈線状の段差をもち、口縁端部は内傾する段差をもつ。2は壺身であり、口径11.8cm、器高4.2cmを測る。立ち上がりは直立し、端部には鈍い稜を残す。3は壺蓋の小片で図は反転復元したものである。復元口径は15.0cmを測る。4は壺身であり、図は反転復元したものである。復元口径は13.0cmを測る。立ち上がりは内傾気味で端部は丸くおさめられている。これらはMT15型式からTK10型式への過渡期の段階のものと推定され、6世紀前葉から中葉にかけての時期に古墳が築造されたものと考えられる。



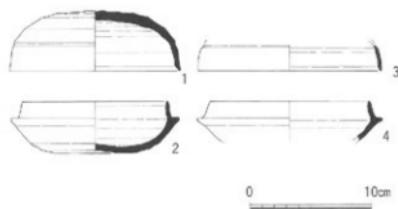
写真8 9号墳検出状況（南西より）



第4図 9号墳周溝内出土遺物実測図



写真9 10号墳検出状況（西より）



第5図 10号墳周溝内出土遺物実測図

⑤12号墳

12号墳は10号墳の東隣から検出した円墳でA-4区の東端付近に位置している。東半部は新川の浸食によってえぐり取られる形で消失している。墳丘盛土部分と主体部も削平により詳細は不明である。周溝から復元すると推定9.4mの円墳となる。

周溝は幅1.5~2.5m、深さ0.4m前後を測り、埋土中から小児頭大から人頭大の塊石が少量出土している。また、南部と西部から集中的に須恵器片（蓋坏・短頭壺）が出土しており、TK10型式段階に位置づけられる。古墳の築造は6世紀中葉頃と推定される。

⑥11号墳

11号墳はA-5・6区にまたがる形で検出された。S-A区から東に延びる丘陵先端付近の南側斜面に位置していたものと考えられる。整地造成により墳丘部や主体部は消失しており、周溝のみ検出された。また、墳丘東端は畦畔に沿う形で設けられた中世期の溝によって搅乱を受けている。

周溝は幅1.7~4.6m、深さ0.5~0.95mを測り、東端付近は畦畔形成によって消失している。残存部分より墳丘規模と形状を求めるに直径約11.8mの円墳と想定される。周溝は全周せず南西部で上端幅約70cmの陸橋部を設けている。西側部分で周溝が6mにわたって大きく拡がる部分があり、この地区的墳丘側斜面部に接する形で人頭大の塊石を集中的に検出した。周溝内に設けられた小窓穴式石室の可能性も考えられたが、明確にできなかった。周溝の北側部分と東側部分では須恵器が破碎された形で集中的に出土している。

出土した須恵器は壺・高杯等であり、他の古墳で一般的に認められた蓋坏が出土していない点に特徴がある。第6図は11号墳周溝内から出土した高杯である。高杯は長脚で、長方形の3方向1段透かしをもつ。杯部の底部外面の2本の沈線で挟まれた部分に波状文が施されている。MT15型式に併行する段階のものであり、6世紀前葉に古墳が築造されたものと考えられる。



第6図 11号墳周溝内出土遺物実測図



写真10 12号墳完掘状況（南より）



写真11 11号墳検出状況（西より）

⑦13号墳

13号墳はA-5区の11号墳の西隣から検出された円墳であるが、削平によって最も保存状態が悪い古墳である。わずかに円弧状につながると思われる3条の溝状遺構が残存しており、溝内から須恵器片が比較的多く出土していることから古墳と認定した。残存する周溝は最大幅1.2m、深さ0.15mを測り、本来の古墳規模は直径13.2m程度であったものと推定される。

東側の周溝から甕、提瓶等が出土しており、6世紀中葉前後に古墳が築造されたものと推定される。



写真12 11、13、14号墳完掘状況 (南東より)

⑧14号墳

14号墳はA-5区南西隅付近の11号墳と13号墳の南隣から検出された円墳で、やはり後世の削平によって墳丘盛上部分・主体部を失っている。また、畦畔造成によって墳丘南半部は完全に消失している。

周溝は幅0.8~1.7m、深さ0.2mを測り、古墳の規模は直径7.8mとなる。周溝内から須恵器甕の破片が少量出土しているが、詳細な時期は不明である。

⑨S H01

S H01は7号墳に西隣して検出され、その東側は7号墳周溝西部と切り合い関係にある竪穴住居である。平面プランは東西4m、南北3.5mの楕円形を呈する。丘陵側で最大深度約0.3mを測る。床面より検出したピットは4穴でうち主柱穴は2穴と考えられ、配置より2本主柱の竪穴住居とみなされる。主柱穴間の距離は1.5mである。床面中央部よりやや南寄りでは不整形を呈する土坑を確認しており、埋土に炭化物を多く含んでいることから炉跡であると考えられる。床面から壁溝やベット状遺構は確認していない。竪穴内より弥生土器高壺、甕の破片を少量検出しており弥生時代後期後半から終末期に位置づけられる。



写真13 S H01検出状況
(北西より)

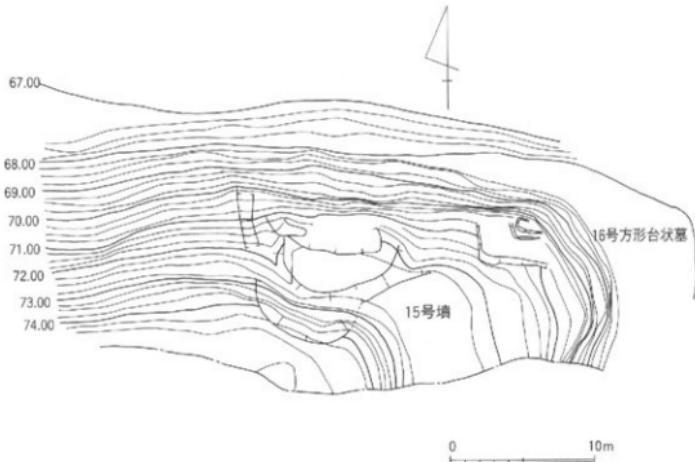
S-A区

①16号方形台状墓

同遺構は丘陵先端部の緩斜地に位置する。同丘陵は果樹園による削平整地を受けており、本来の地形は損なわれている。南辺及び西辺南半部の周溝、内部主体の西半部について確認できた。現存部分より想定すると台状平坦部は東西7.2m×南北5.4mで長方形を呈する。

周溝内のマウンド基底部には東西3.7m、南北1.4mの列石が残存しており、拳大から小児頭大の塊石が2~3段に整然と積まれている。塊石には安山岩、花崗岩が用いられ、前者がその大半を占める。周溝はL字形に残存していた。保存状態の良好な南辺では南側(外側)の深さ50cm前後を測る。残存する列石上端までの高さは約20cmである。列石は盛土上に並べられている。後述する主体部の土壤は地山から掘り込まれているため、埋葬終了後、盛土と列石構築が並行して行われたものと考えられる。

主体部は地山上面から直接掘り込まれ長方形プランをもった2段掘りの土壤で、N-74°-Wを主軸とする。上段土壤は深さ8~10cmで、下段との間のテラス幅は20~40cmを測る。下段土壤の残存する長さは1.9m、幅0.9m、深さ0.6mを測る。下段土壤掘り方の斜面に沿って厚さ5cm程度の粘土が貼り付けてあった。下段土壤の東半部を中心にガラス小玉を多数検出した。主体部の南側マウンド上と周溝内より鉢、壺の土器片を検出しており、弥生時代後期後半に位置づけられる。



第7図 S-A調査区遺構配置図



写真14 S-A調査区近景
(北東より)



写真15 16号方形台状墓検
出状況（東より）

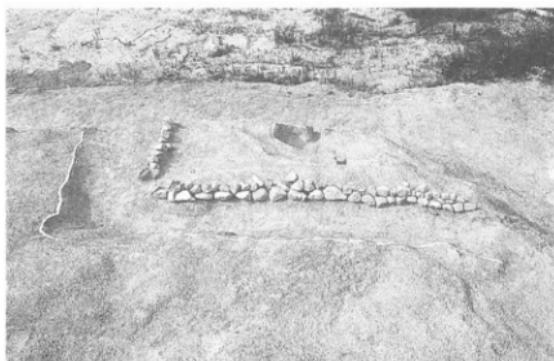
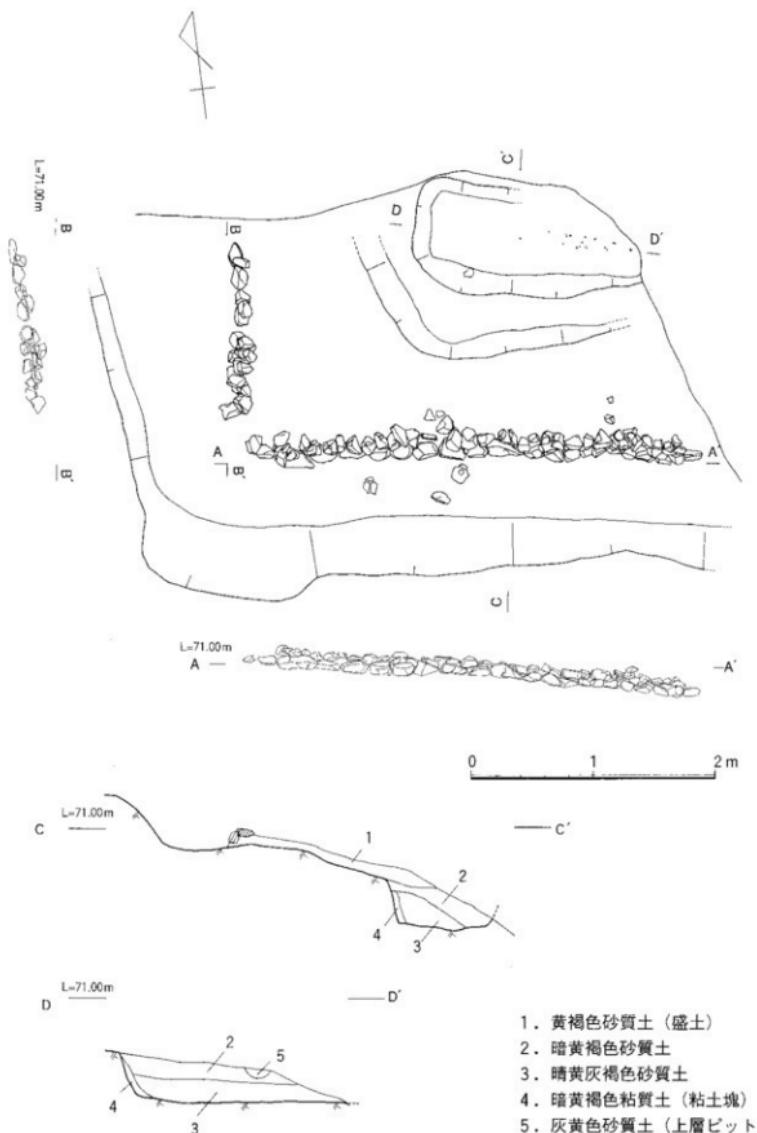


写真16 16号方形台状墓検
出状況（南より）



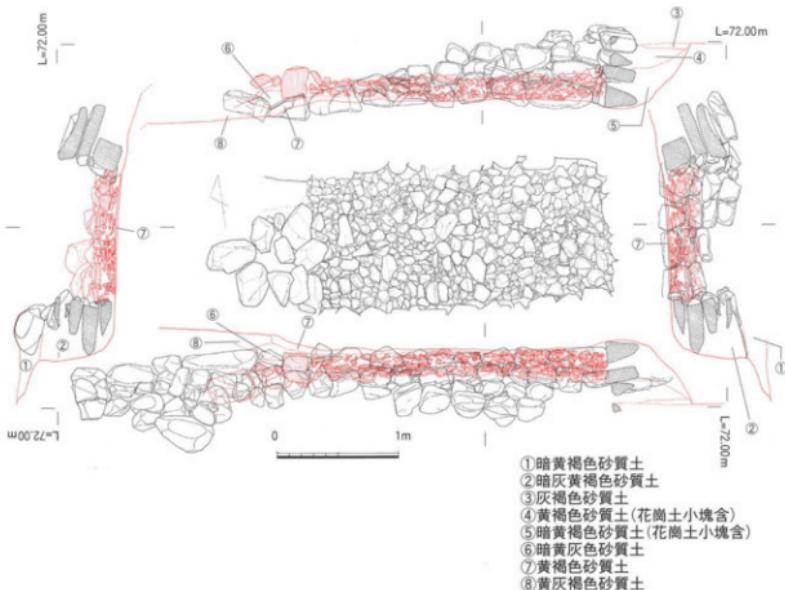
第8図 16号方形台状墓平・断面図

②15号墳

15号墳はS-A区の丘陵北斜面に立地する。ここは果樹園としての土地利用や整地造成の影響をかなり受けしており、石室以北の墳丘部分はほぼ完全に消失している。墳丘南半部はほぼ本来の形をとどめている。現存部分より15号墳の直径を復原すると約9mの円墳と想定される。石室の主軸方位はN-86°-Wに向いており、ほぼ西に開口する右片袖式の横穴式石室である。玄室、羨道ともに比較的長大な安山岩と花崗岩を使用し、小口積みに構築されている。石室上半部は消失しているが、残存する石積みは3~4段で残存高は0.8mを測る。玄室の規模は全長2.45m、奥壁幅1.0m、中央幅1.05m、玄門側の幅1.07mを測り、床面は拳大までの小礫を深さ12~20cm程敷き詰めている。小礫は奥壁付近でやや大型の石を使用しており、羨道側との差が明瞭であった。また棺台と思われる大型の石も散在していた。玄門には3石からなる仕切石が置かれ、羨道部にかけて閉塞石が検出された。羨道部は左側壁が崩落により欠損しているが現存部分で1.95mを測り、長さ1.70mの墓道がこれに続き周溝に至っている。

第10図は15号墳から出土した須恵器である。1は羨道部から出土した壺身であり、口径10.7cm、器高4.6cmを測る。2は石室内から出土した壺身であり、口径10.6cm、器高4.0cmを測る。7世紀前半でも中葉に近い時期に位置づけられる。追葬の有無やその方法について今後検討を加えていただきたい。

写真18は15号墳西の包含層から出土した紡錘車である。紡錘車は上面2.7cm、下面5.0cm、高さ1.8cmを測り、中心部に直径0.6cmの穴をもち、碧玉製で複合鋸歯文の文様が刻まれている。



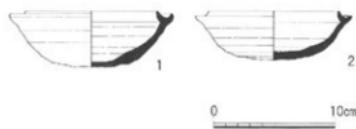
第9図 15号墳石室実測図



写真17 15号墳石室検出状況（東より）



写真18 15号墳石室検出状況（南より）



第10図 15号墳出土遺物実測図

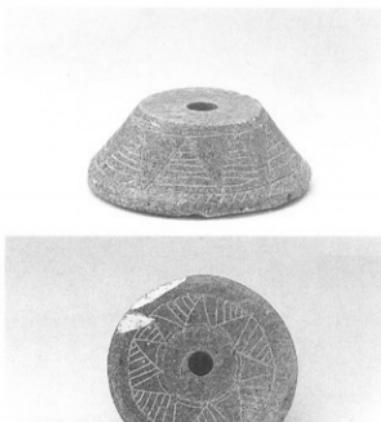


写真19 紡錘車

B区

① 6号墳

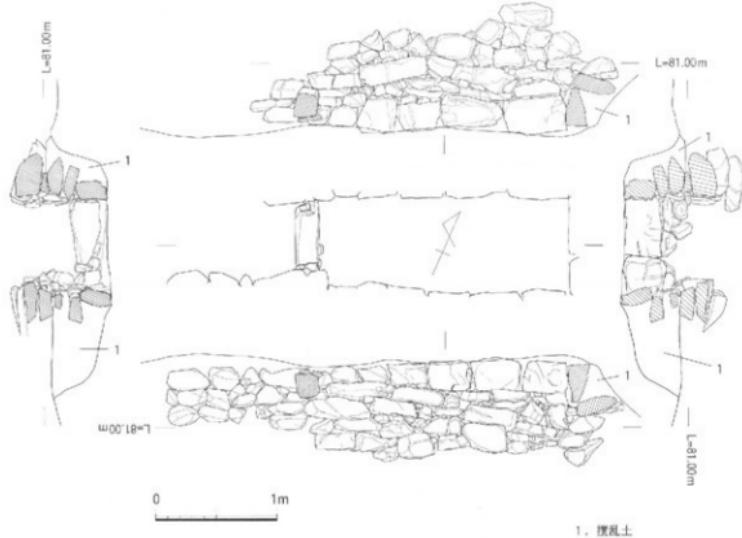
6号墳は丘陵尾根平坦部に立地し、後述する土壙24と切り合い関係にある。昭和57年の調査後に埋戻しされており、今回は解体調査となる。主体部直上で標高81mを測る。18号墓南溝の上層より須恵器壹の細片を検出したことから、この地点までを古墳の範囲と判断し、直径約10mの円墳と推定した。石室の主軸方位はN-67°-Eを向いており、ほぼ西に開口する両袖式の横穴式石室である。玄室・羨道部ともに安山岩・花崗岩を使用して小口積みに構築されている。玄室の平面プランは全長2.07m、奥壁幅0.75m、中央幅0.77m、玄門側の幅0.55mを測り、玄門には長大な仕切石が置かれている。また、羨道部は長さ1.22mを測り、未熟な構造となっている。玄門立柱はみられず、玄門部から羨道部の基底石が直線的に並ぶところに特徴があり、この点は15号墳と共通するものである。墓道は長さ2.1m、幅0.5~0.6m、羨道部入口付近で深さ0.35mを測る。第11図は6号墳周溝内から出土した須恵器壹である。図は反転復元したもので、復元口径は14.6cmを測る。



第11図 6号墳周溝内出土遺物実測図



写真20 6号墳石室状況（北西より）



第12図 6号墳石室実測図

②上墳墓群（分布の特徴）

土墳墓群はB区の尾根稜線上に位置し、次の6群に分かれる。

I群

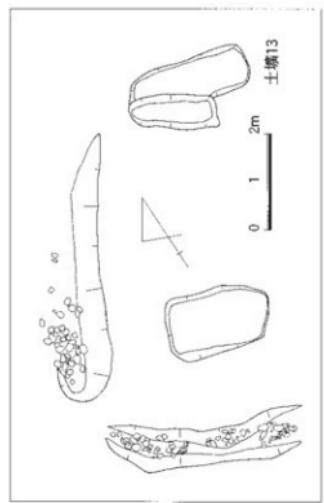
I群は尾根上小ピークに位置し、土墳1～8の8基と壺棺1、2で構成される。土墳は尾根稜線に対し直交するもの6基、平行するもの2基からなる。土墳1には小口部に板材か石材を埋設したと思われる小溝が検出された。土墳4、5は切り合い関係にあり、時期差も想定される。また、溝1はI群の南方を画する区画溝と想定されるが、土墳9、10を避けた形で途切れていますため、時期的に後出するものと考えられる。壺棺1は弥生時代後期後半から終末期のものと考えられる。

II群

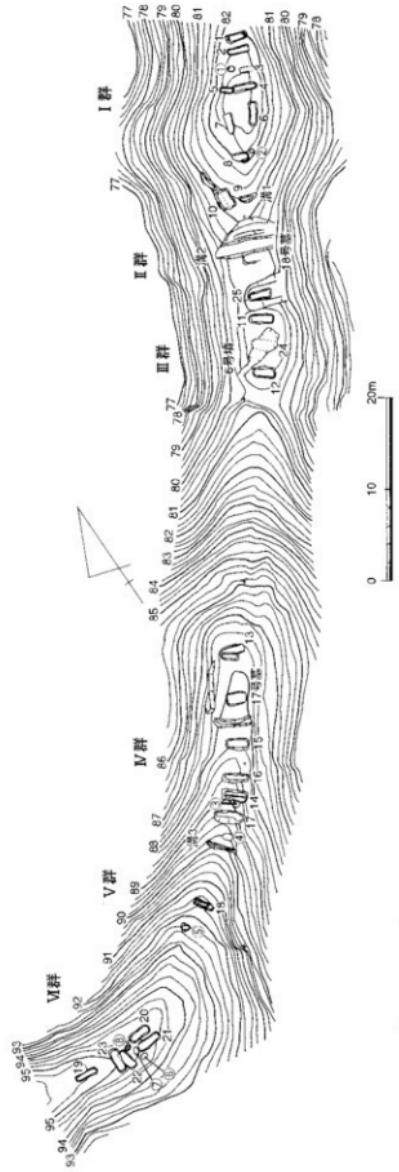
II群はI群から南に下る斜面部に位置し、土墳9、10及び18号墓からなる。土墳9、10は尾根稜線に対し平行している。II群はI群と次に説明する3群に含めることも可能であるが、区画溝と思われる溝1、2は2基の土墳や18号墓を避けたり、切ったりしていることから、時期的に先行すると思われるため一群として設定した。さらに土墳9、10は切り合い関係にあり、時期差も想定される。18号墓の北側溝及び主体部の土墳は溝2に切られている。南側溝は土墳25の下層から検出されており、一辺約7mの方形台状墓とみなされる。北側溝から拳大の塊石が数多く検出されており、16・17号墓と同様に列石を伴っていたものと推定される。



写真21 I群全景（北東より）



17号墓平面实测图



III群

III群はI群の南の尾根上小ピークに位置し、土壙25、11、24、12の4基で構成され、各土壙は尾根稜線に対し直交している。また、4基の土壙は等間隔に整然と掘られている。土壙25から底部片が出土しており、弥生時代終末期のものと考えられる。なお、土壙24は6号墳主体部と切り合い関係にある。また、溝2はIII群の北方を画する区画溝と想定される。

IV群

IV群より西方は急斜面が延長25m程度続いている。IV群はその斜面が緩やかとなる地区に位置する。方形台状墓の17号墓、土壙13～17の5基及び壺棺3、4で構成され、各土壙は尾根稜線に対し直交している。17号墓は主体部を土壙とし、東西及び北辺の周溝を伴っている。周溝の北東及び北西隅は陸橋状に途切れている。周溝内からは多くの拳大の塊石が出土した。また、脚付小型壺、小型丸底壺が出土しており、弥生時代終末期に位置づけられる。また、土壙13は17号墓の周溝に切られていることから時期的に先行する。壺棺3、4は土壙14、17にそれぞれ付随する形で検出された。いずれも大型鉢を蓋として使用しており、弥生時代終末期に位置づけられる。なお、壺棺4の西でIV群の西端を画すると思われる区画溝3を検出した。

V群

V群はIV群の区画溝3の南のやや急な斜面部に位置し、土壙18と壺棺5で構成されている。ここは戦前後に土地利用がなされており、削平がかなり見受けられ、その免れた所において2基の遺構を検出したのみである。土壙18は尾根稜線に対し直交しており、埋葬施設は二段掘りの構造となっている。土壙18の西側の上方から壺棺5を検出している。

VI群

VI群はV群のさらに奥の尾根平坦部に位置し、今回調査したなかでは最も高所に位置する。土壙19～23の5基と壺棺6、7、8で構成されている。土壙19、20、21は尾根稜線に対し平行しており、土壙22、23は尾根稜線に対し直交する。土壙22、23は切り合い関係にあり、土壙22が時期的に先行する。土壙20からは下川津B類土器の高杯脚部、土壙22からは底部片がそれぞれ出土しており、いずれも弥生時代終末期に位置づけられる。



写真22 IV群・17号墓検出状況（南西より）



写真23 IV群・壺棺3検出状況（北東より）



写真24 I、II、III群全景
(南西より)



写真25 IV群全景
(北より)



写真26 VI群全景
(東より)

第4章 まとめ

これまで西土居古墳群①は弥生時代後期の竪棺や土壙墓、6世紀末から7世紀前葉にかけて箱式石棺・横穴式石室を内部主体とする古墳の存在が明らかにされていたが、今回の調査の結果、西上居遺跡群は尾根筋頂部から北東方向に延びる小丘陵上（B区）では弥生時代後期後半から終末期にかけての土壙墓、方形台状墓、壺棺などの墓域が形成されたことが明らかになった。また丘陵の谷筋を含む扇状地状の緩傾斜地（A区）では弥生時代後期後半から終末期を中心とする集落域の存在と6世紀前葉から中葉、7世紀前葉から中葉の群集墳が確認された。以上のように集落域が大きく拡がる点と群集墳の様相が明らかになった意義は大きい。

A区では後世の土地利用による削平のため主体部の確認ができなかったが、古墳時代後期前半の古墳が境を接する形で築造されている。中期末及び後期後半の群集墳の調査例は多いが、県内では空白であった時期のものである。群集墳の展開と地域小酋長層の動向を考える上で欠くことのできない資料となる。また、包含層から出土した紡錘車の存在や古墳の配列から予測すると広範囲に墓域が展開していると考えられる。殆どが開墾による消滅のため時期や性格は不明であるが、北隣に立地する源訪カンカン山古墳群（11基）との関係も注目される。6号墳、15号墳については石室がほぼ西方に開口している点に特徴がある。これは西方の丸山古墳、東の長尾町に所在する尾崎西遺跡S T-162②、北山八坂古墳③ついても同じことがいえる。一般的に南に開口する横穴式石室が多いなかで、地域の大きな特徴となっている。これらはいずれも玄門立柱が漢道より内側にせり出しておらず、片袖式が多いという特徴も指摘できる。

B区では尾根稜線に対し直交、つまり主軸を東西とする土壙が大半を占めている。主体部両脇に小口溝を有した上塙1を除いては、いずれも地山を直接掘り込んだ土壙である。検出したこれら上塙墓群は6群に分けることができ、グループを形成して埋葬されている。各群は若干の時期差はあるものの規則性をもつ墓壙配置がみられ、墓域を画する区両溝を設けるなどその計画性が伺える。IV群の17号墓、II群の18号墓は周溝内に塊石が転落しており、列石の存在を伺わせる。また、17号墓の周溝剛が陸橋状に途切れている点も特徴的である。これらは土壙1基を主体部とする点でも共通する。別丘陵に位置する16号墓も複数の上塙をもたず、1土壙の主体部東半から淡青色を呈したガラス小玉を多数検出している。これら3基の方形台状墓は出土土器も比較的多く、供獻器とみなされることから上塙群との格差が認められる。墳丘部には列石を配していたと想定され、低墳丘で平面形態を方形としている墳墓である。東隣地域では丘陵上に確認された墳墓の形態は方形を呈しており、他に山大寺池西丘上3号墓や寒川町極楽寺墳墓群1号墓④が知られている。一方、平野部や台地状低丘陵部では、高松市林・坊城遺跡の円形周溝墓3基⑤、高松市空港跡地遺跡のS T10⑥、長尾町尾崎西遺跡のS T-24⑦、長尾町陵遺跡のS T-02⑧、寒川町森広遺跡のS T-301・302⑨、白鳥町神越遺跡S D03⑩などはいずれも円形周溝墓であり、いずれも方形台状墓より大型である。白鳥町成重遺跡では方形周溝墓⑪も検出されている。これらの差は細かい時期差によるものか、階層の差を示しているものか、あるいは出自や交流関係によるもののかなど問題点は多い。

以上のように今回の調査によって三木町だけでなく県内における各時期の墓制を解明していく上での貴重な資料を得ることができたが、今後は新川を挟んだ対岸の丘陵部に位置する長尾町丸井古墳との関係も視野にいれながら本報告で考察していきたい。

〈註〉

- ①渡部明夫『四十居古墳群－香川県木田郡三木町大字井戸字西上居における群集墳の調査－』西土居古墳群発掘調査団 1983
- ②森下英治『尾崎西遺跡 県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成4年度』香川県教育委員会 他 1993
- ③高島 豊他『八坂墳墓群・北山八坂古墳 工業用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長尾町教育委員会 1997
- ④片桐節子『極楽寺墳墓群－寒川町上水道浄水場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』寒川町教育委員会 1998
- ⑤乗松真也『林・坊城遺跡 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』香川県教育委員会 他 1998
- 森下英治『林・坊城遺跡 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』香川県教育委員会 他 1999
- ⑥佐藤竜馬『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成4年度』香川県教育委員会 他 1993
- ⑦阿河銳二『陵遺跡 県住宅供給公社による宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長尾町教育委員会 1999
- ⑧山本一伸他『森広遺跡 大型店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』寒川町教育委員会 1997
- ⑨塙崎誠司『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度 神越遺跡』香川県教育委員会 1997
- ⑩森 格也『成重遺跡 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』香川県教育委員会 他 1999

ふりがな	にしのどいいせきぐん						
書名	西土居遺跡群						
副書名	西土居工業団地用地造成に伴う埋蔵文化財調査概報						
卷次	1999,12						
編集者名	三木町教育委員会 社会教育課 主事 石井健一						
編集機関	三木町教育委員会						
所在地	〒761-0692 香川県木田郡三木町大字氷上310 TEL 087-898-1111(230)						
発行年月日	1999年12月						
頁数	例言・目次等	本文	図版	総頁			
	5頁	23頁	0頁	28頁			
ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積		
	市町村	遺跡番号			m		
にしのどいいせきぐん 西土居遺跡群	三木町大字井戸	37341	34度14分17秒	134度9分34秒	94, 8.22~ 94, 10.30 95, 1.17~ 96, 7.31	10,000	工業団地 用地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西土居遺跡群	集落古	弥生時代 古墳時代 中世	堅穴埴居 土方形台古	住状墓坑 墓壙など	弥生土器 ラス器 須恵器 鐵師	玉器 車器	土群 壙墓群

西土居工業団地用地造成に伴う
埋蔵文化財調査報告

西土居遺跡群

平成11年12月

編集・発行 三木町教育委員会
木田郡三木町米上310
電話(087) 898-1111

印 刷 株式会社 中央印刷所